

仏教を考える

田上太秀

はじめに

仏教用語は辞書を引いてもなかなか理解するのが困難である。意味は分かっても他の用語との関連の上で理解することはなお困難な場合がある。それだけならまだよい方である。この用語に内包する思想を今日の意味で、現在の日常の中ではどのように理解すればよいかということになると、一層理解に苦しむ。講義中、通り一遍の用語の説明、文章の解説ならさほどむずかしいとは思わないが、それらが現代にはどのように生かされ、適用できるか、そして現代の日常生活の中にそれを説明するようなたとえがあるのかどうかなどいろいろの問題を考えると、二千数百年前の思想を理解することは、むずかしい。

こゝに論述したものは講義中に出て来た用語、教理などについて思考して得られた筆者の理解と解釈したものの中の二、三である。

一 無明について

無明 (avidyā) とは現代語訳すれば「無知」ということである。これは仏教思想の中では、根本悪として煩惱の最たるものと考えられている。ところで、こゝでは無明の現代的意味を考えてみようと思ひ、私見を述べるものである。

日常生活の中で、なにか悪いことあるいは失敗をなした場合、「君はそれを知っていて犯かしたのか、知らずに犯かしたのか」と問われることがしばしばある。常識的考え方からすれば、その尋問は「知って犯かしたことは悪いが、知らずに犯かしたことは許される」という判断があつてなされている。この判断あるいは観念は正しいのだろうか。この尺度だけをもって人間の行為を色分けすることは少々紋切型でありはしないか。つまり、知らずに犯かしたことが悪いという考えは成立しないのだろうか。

前述のように常識的考え方では「知って犯かしたことが悪

い」と判断されるが、仏教では「知らずに犯かしたことが悪い」というのがその立場ではないかと考えられる。

まず「知って犯かしたことが悪い」という観念は、どこにその源泉を求めることができるだろうか。この観念はキリスト教世界のもののように、今日のこの常識的観念はキリスト教思想を土台に行われていたようにも考えられる。

キリスト教は原罪を説く。それは人間の根源的罪である。つまりアダムとイヴの二人に背負わされた罪である。「知の木の実」を食べるなど神に命令され、かれらは食べないことを神と約束した。しかしかれらはその約束を遵守できなかった。食べてはいけないことを知っていたにも拘わらず食べた罪は神との約束を破ったことである。知って犯かした行為は神によってきびしく責められ、二人は神の楽園から追放された。知っていたこと、それは神との約束である。これを破ったこと、こゝにキリスト教の原罪があるようだ。

たゞこゝで問題として残すことは、アダムとイヴは「知の木の実」をなぜ食べてはいけないなかったのか、ということである。かれらに「知の木の実」を食べるなど禁じたことは、無知でいることが二人にとってもっとも幸福であり、同時に神の意にもっとも叶うものであり、神の喜ぶところの状態であるというのだろうか。こゝには知と無知の道德的価値の比重が秘められているようである。いずれにせよ無知で犯かした

ことは、知って犯かしたことに比べると、神の意に逆いた行為がないだけに罪悪感はいささか、あるいはないと考えられているのではないか。

キリスト教の原罪に対して、仏教では無明を説く。前述のように「知らないこと」の意味である。しかし仏教の四諦（四つの真理）の中の苦諦、集諦に説明される内容を見ると、苦悩に満ちた現実世界のありさまは、究極的には無明によって現象しているという。具体的に言えば、生老病死の四苦（あるいは八苦）は渴愛にその原因があるが、その渴愛も根源的には無明によって生起していると考えられている。つまり「知らないこと」が根本原因となって、すべての苦は生起しているというのである。価値観におきかえると、「知らないこと」は、よくないことである。知らずに犯かしたことは、「知らなかったこと」が悪いという意味になるわけで、「知らなかった」では済まされない、なぜ知ろうとしなかったかということまで問われるのが仏教の倫理観であろう。

根本悪としての「無明」は、何について知らないのかといえ、仏教では縁起について「知らないこと」である。すべての現象しているものは条件的生起で、すなわち自立自存のものではなく、すべて相依相関の種々の条件、原因の絡み合いで成立していることについて「知らないこと」である。

罪を犯かす、失敗をする。いずれにしてもそのような結果

になるとは知らなかったでは済まされない。世間の仕組みについて、自己のおかれている立場、自己の存在、自己と世間の関わりなどについて、なぜ知ろうと努力しなかったか、自己自身の問題にしても同じである。学ぶ、知る、記憶する、習慣づけるなどは仏教の修行の基本的行為である。その中でも学び、知ることを怠っている、これは無明である。一切は縁起していることを学び知ること、これは修行の第一歩であるように思われる。知らずに行動してはならない。

仏陀は一切智者といわれる。すべてを知りつくした人である。このように仏教の修行の究極は一切を知ることにあるともいえる。つまり縁起している事実をすべて知り尽くすこと、これは無明をなくすことになる。「知らないこと」ゆえに、すべての行為に苦が随伴する。それは人間を結果として悪なる道へ導くことになる。

二 四諦の滅について

四諦とは四種の真理のことで、縁起を体系的に説明したものである。釈尊は施論、戒論、生天論の三論を教化の導入として説かれて、そのあとに四諦を示して世間のありさまと理想的生き方を教えられた。こゝに論述しようとする内容は四諦の各諦について説明するのではない。四諦の滅諦の意味について考えられるものである。滅諦が人間の現実生活とどの

ような関わりの上で説かれたものを筆者自身の納得した範囲で論じてみようと思う。

四諦は苦諦・集諦・滅諦・道諦の四種である。苦諦は苦に関する真理で、苦 (*dukkha*) とは原語の意味では「思い通りにならない」という。これによって四種、あるいは八種あるとして四苦八苦というが、これによって説明されるのが現実世界である。現実世界はまさに苦である、これが一切行苦の意味である。すべてのもの、すべての移り行きは自分の思い通りにはゆかない、自分の考え通りに、希望するようには変化したり、持続したりはしない。忍耐をしなければならぬ世界である。まさに娑婆 (*saha*) である。

この現実世界のありさまはなんに起因するかを探究して、根本原因を無明 (*avidyā*) とした。すべてのものは相依相関の条件的生起であることを知らないこと、すなわち無知が苦なる現実世界を現出しているという結論に至ったのである。一切苦は無明によって生起する、そこで現実世界のこの種々なる苦はどうすればなくすことができるかということで滅諦、道諦の二つの真理が教示された。

まず道諦では八正道が教えられる。八種の中道、つまり八つのバランスのとれた生き方を教えたものである。精神的にも身体的にも極端に走らない適度の生活を指導したものが八正道である。この八種の中道を実践することによって人間は

苦から解放されるといふ。それは滅諦をえたことである。

滅諦の滅の原語は *nirodha* である。滅の語は、なくなる、消えてなくなるなどの意味であるが、原語の意味とはいささか異なる。原語は制御する・遮止する・抑制するなどの意味である。原語の意味でいえば、煩惱（ここでは三毒のこと）が完全に本体までなくなるのではなく、ローソクでいえば燃え尽さかる火が消えた状態である。ローソクの本体はまだ燃え尽きていくわけではない。火が消えただけである。そして燃え残りのローソクに二度と火が点じないようにすること、それが滅の原語の意味である。したがって、この滅は涅槃 (*nirvāṇa*) と同じ意味に理解してよいだろう。

滅は煩惱が生起しないように制御され、遮止されていることだが、これがいわゆるさとりの境地だといわれる。これあるいは四諦そのものが理論的に理解されたときに見道という最初のさとりをうるとされ、さらに実践的にも理解されたときに、その人は阿羅漢の果報をえるとされる。

概説であるが、ここまでが四諦の説明として一般に行われているものである。しかしこれではどうも言葉の説明だけであり、身近かなこととして納得ができない。問題となるのは滅であろう。

前述のように滅は三毒が制御され、遮止された状態であるが、それでは苦諦の四苦八苦とどう結びつくのか、四苦八苦

は三毒によって生起するというのならば、三毒が制御されることによって、四苦八苦は当然なくなるということになる。では四苦八苦がなくなる制御されるというのはどういうことなのか。具体的にはさとりの境地、その状態では生老病死等がなくなるのか、制御されるのか。一例をとっていえば、滅諦をえたならば、死ぬことがないのか、死を制御するとは、死を自分の思うように支配できるというのか。おそらくこのような意味が滅諦の所説ではないであろう。

滅は四諦の中では苦に相對する意味として、あるいは真理としてあげているので苦の反對の樂の境地なのかという疑問が生起する。苦の語意が「思い通りにならないこと」であれば、当然、反意語の樂は思い通りになるといふ意味であるわけだ。では、滅諦では自分の思い通りになんでもできるという境地であろうか。勿論、大乘仏教の教理からすれば、仏の境地は融通無礙で、一切処に遊戯しているわけであるが、ここ四諦の滅諦の境地は苦の反對の樂、思い通りになんでもできるということではないと考えられる。滅の境地はもっと現実的な生き方、境地を教えたものだと考える。

苦諦は一切は苦であるという現実の姿を教えたことだが、現実の人間の生きざまは、その一切苦を自覚していないということを指摘している。現実世界が苦そのものであることの説明であるばかりでなく、現実世界が苦であることについて

無自覚な生活を人間が飽くことなく送っている現実の説明も苦諦ではなされている点に気がつかなければならぬ。これに対して滅は苦の自覚を教えたものだといえる。つまりすべてでは自分の思うようにならないことを理論的にも実践的にも理解し自覚したこと、これが滅の境地であろうと考えられる。三毒がなくなる、制御されるとは一体どんな心境を指しているのかと問われるならば、それは一切は苦であることの自覚をえたこと以外にならぬと答えなければならぬだろう。

『長老・長老尼偈』の長老、長老尼たちは最上の安らぎ、不動の心、すがすがしい心境などとさとの心境を各々述懐している。かれらはみな一切苦の自覚をえたことの喜びをこのように述べているのである。すべては思い通りにならないことが自覚されれば自己中心的な行為や欲望が生起しなくなる。一切は縁起している故に、自己中心的な生き方、考え方をすれば、自然にそこに無理な生き方、考え方が生れて来る。一切は縁起していることが理解されれば、一切苦の自覚となる。一切苦の自覚は一切は縁起所生を知ることである。一切は縁起所生であることを知る、これは明である。一切は縁起所生であり、故に一切苦であることの無自覚は無明である。

縁起を見るものは法を見る、法を見るものは縁起を見るといふ教えは、縁起を見るものは一切行苦を見る、一切行苦を見るものは縁起を見ると換言しても、当をえないものでもな

いと考える。この二者の関係を教理的に説明したものが三法印あるいは四法印である、諸法は無我（非我）であるから、諸行は無常である、だから一切行は苦である、これが自覚されたとき涅槃寂静となる。諸法無我也諸行無常も一切行苦の教理的説明として設けられているといえよう。

要するに四諦は苦の無自覚と苦の自覚とを軸にして無自覚の根本原因として無明をあげ、苦の自覚への手段として八正道を設けている。八正道は縁起観の実践であり、縁起を知り、理解すること、すなわち無明の滅である。無明滅するがゆえに四苦八苦が滅するという。四苦八苦の滅とは、一切は苦であることの自覚がえられたならば、四種あるいは八種の現実の生きざまに対する煩惱が生起しないことを意味しているといえる。無明がなくなったときに生老病死がなくなるのではない。そうではなくて、生老病死は苦であることが自覚されるのである。滅諦は、人間が一切苦の自覚の生き方、考え方に立脚するとき、平安寂静の境地をうることでできると教えているのではないか。

三 無限の海について

「無限の海」という小題をもとに大乘仏教思想を考えてみようとするものである。「無限の海」という表現はとくに気にするほどのない、ありふれた表現である。これによって大

乗仏教思想を論ずるとは大げさなと思われるかもしれない。ところが「無限の海」という表現には大きな陥しあながあり、私たちはそれに気づかず、安易にこの語句を使用すれば、その陥しあなに落ちこんでしまうであろう。論述はその陥しあなを暴くことにある。

「無限の海」とむずかしく表現したが、簡単には「限りない海」ということである。どういうわけか、私たちはあまり「限りある海」とは普通には言わない。文章にも歌にも、喩えにも「限りある海」とは言わず「限りない海」という表現が使用されている。

さて「限りない海」の海の語であるが、海は陸と相対的に使われている語である。そして水が陸によって囲まれている面積と水量とが最大のものが海である。陸地に囲まれているもの、あるいは逆に陸地を囲んでいるもの、それが海である。その海が限りないというのはどうということか。「限りない」とは辺際がない、限界がないということだが、「限りない海」とは「辺際のない海」「限界のない、区切りがない海」のことである。行けども行けども海である。限りない海である。陸地がないのである。陸地があったならば限りないとは言えない。限りないという形容詞を使うならば、海の表現そのものがおかしいことになる。限りないのだから、すべて海ばかりである。そこでは陸地の存在がなくなる。陸地がないのだ

から海という表現さえなくなることになる。海は陸の相対語であるから一方がなくなれば他方も自然に用をなさなくなり、なくなる。かくして「限りない海」という表現は矛盾している。

「限りない海」といえば、その時海とか陸とかの表現はなくなり、ただ限りない水のみしかないことになる。あえて言うことが許されるならば、「限りない海」はないが、「限りない水」はあるだろう。その水を陸との相対の上で、池とも湖とも海とも河川とも呼んでいるのだから。

仏典中、無量・無数・無辺などの表現があるが、これらは何を意味しているのだろうか。それらは甚だ多いとか、きわまりがないということだと簡単に考えて理解すべきものではないと思う。これらも「限りない海」と同じように考えるならば、その意味するところが了知されよう。

仏は凡夫と相対して用いられる。そこで無数の無量の仏という表現を例にとれば、その時、そこには凡夫の存在はないのである。それは凡夫の一人たりとも残存していることを許さない表現である。仏ばかりである。それが無数・無量の仏である。凡夫の概念が介在する余地はどこにもない。凡夫がないのだ。凡夫がないのだから、したがって仏もなくなる。凡夫のいない、仏ばかりであるところはどうして凡夫だ仏だと区別する必要があろう。無量の無数の仏というのは凡夫・

仏の分別・差別を超越したところを表現したものである。逆に無量無数の凡夫といったら、これも同じ表現である。無量の形容詞がつくと、その下の名詞はそれが他と区別して表現する意味をもたなくなる。無量無数の仏といえは仏という表現の存在理由がない。無量無数の凡夫も同じだ。これは無量無数の仏と無量無数の凡夫とが同時に同処に存在するとはありえないことを考えれば、いまの論理は理解されるであらう。

また「無量無数の凡夫を成仏させようと誓願を立てた菩薩」は多い。これも仏典にはよく見かける表現であるが、考えてみれば、無量無数の凡夫というのは凡夫だけであって仏がどこにもいないことである。凡夫一色である。将来成就すべき仏がない。無量無数の凡夫には成就すべき仏はない。仏のない凡夫だけであるとき、凡夫と表現する意味はない。無量無数の凡夫に成仏・不成仏の分別がどうして必要であるう。

限らない布施とは布施をする、布施をしないという分別を超えている。つまり布施をしたと意識したときに、その行為が終ったことを振り返っていることである。しかし限らない布施は布施をしたという意識をもつところがなく、つねに布施をしているだけである。布施のしっぱなしである。その行為にふり返える過去はなく、つねに現在進行形でしかない。

限らない布施とは布施の行為の終りがなく、中断することがない。だから布施をした、しないなどの意識もなく、分別もない。そこには布施という概念さえなくなる。

無辺無数の仏国土に相対して穢土はない。すべて仏国土である。一微塵の穢土が存在したら、無辺無数の仏国土とはならない。無辺無数の仏国土も前述来のように、穢土のないところであるから、仏国土と差別して表現する意味がなくなる。無量無数の仏国土の表現には穢土も仏国土もない、たゞ国土だけである。

証上の修という道元禅師の言葉がある。さとり（証）をえてもなお修行があり、限らない修行を続けるべきだという意味であるようだ。限らない修行、それは只管打坐である。これはいまの論理で理解すればどういうことであろうか。

いまかぎりない海というものがあつたとしよう。ある人がある時、その海のある地点から小舟に乗り、その海を渡ろう（限らない海であるから渡るといふ表現は当たらないのだが）と艫を漕いで進んでいると考えよう。その人はひたすら漕いでいる。行けども行けども島かげも陸も見ることとはできない。数年が過ぎてもいまだ見ることがない。さらに何十年かが過ぎた。依然としてなにも見ることがなかった。その時にかれはいま自分がいるところ、漕いでいるところは海であることに疑問を生じ、ついにこれは海ではなく、たゞ水だけしかないところ

ろだと感ずるようになる。自分が進んで行くところ、そこには陸もなく島もない、どちらが東か西か、北か南か、方角さえ見当がつかないところであることに気づくであろう。その時、かれは漕ぐのをあきらめるか、小舟から投身自殺をするか、あとに引き返すか、いずれかの道を選ぶにしても、それらの方法はこゝでは無意味というより、例えようのない愚かさに見える。はかり知れないおそれに襲われ、いいようもない身のおきようもない寂しさに襲われ、いたたまれない心境となる。そこでかれが為すべきことは何か。それは、臆を漕ぐだけであろう。漕ぐこと自体、さきの方法と同じように愚かなことであろう。どこに向けて何のために漕ぐのかと問われれば、漕ぐこと自体愚かなことである。しかしこの場合積極的行為といえば漕ぐことしかないだろう。その行為が到りつくところのない無目的行為であれ、その行為自体無意味のそのように見えようとも、かれがその限界状況から逃れる方法は、漕ぐことよりほかにはない。漕ぐことが自分を慰め、自分を勇気づけるのである。ひたすら漕ぐだけ、それにすがることがかれの救いである。かれには陸を求めて漕ぐというはからいはない。たゞ漕いでいるだけである。

只管打坐とはたゞひたすら坐ることだ。どこかにさとり
の岸があるわけではない。修行して行けども行けどもさとりと
いわれるところはない。生きている限り自己が存在している

ところは凡夫の限りない苦海だと感じ、そこから逃れようとしてさつりの岸を求めて修行してもその岸はない。たゞ苦海だけである。そこで自己がとるべき道はたゞ修行を続けるだけである。打坐にすがりよりほかはない。打坐をしてさつりの岸に到るわけがない。その保証もない。しかし打坐にすがらないことには、この境遇から逃れる方法はない。自己にある生きる道は打坐に只管であるよりほかはない。それが自己を救う道である。これはなにも打坐ばかりでなく念仏においても同じである。生きるその一大事は、限界状況においては打坐によっても念仏によってよいのである。

無量・無辺・無数の表現は、相対を超え本性にもどることを教え、絶対において自覚することを教えている。そこには言辞の相がなくなっている。仏も凡夫もない、人間だけである。さつりも煩惱もない、たゞ修行だけである。生きること、それは成仏もさつりも求めるものではない。人間が生きる、修行する、それは諸法実相の一つの姿である。そこにはさつりとか仏とか、煩惱とか凡夫とかの分別も差別もない。無量・無辺・無数とは一切言辞の相寂滅を意味することであるようだ。